

ヨハネ二 1-3 「愛と真理を表わす」

今日はヨハネの手紙二の 1-3 節を見ていきましょう。今日考えたいことは、キリスト者としての生き方の中でも、特に私たちは周りの人たちとどのような関わりをもって生活すべきだろうかということです。その答えを考えていきましょう。

息子のアンドリューが小学校 1 年生の時、男性の先生が担任でした。クラスの男の子たちはエネルギーがあり余っていて、なかなか勉強に集中できないことに先生は気づきました。それで朝早く集まって、先生も一緒に走るランナーズ・クラブを始めたのです。アンドリューもこの時間を楽しみに、いつも参加していました。走ることよりも、友達といるのが楽しかったのです。ある日、先生は子供たちを 5 キロ走の大会に登録し、参加を勧めました。親としては、完走できるのかなと思いましたが、でもアンドリューにとっては良い機会だと思い、当日は家族で会場に行きました。しかしクラブから参加したのはアンドリューひとり。ウェンディはあなたが一緒に走らないと、といます。私はランナーではないのです！！そこへ十代の女の子が、友だちがいなくて泣いているアンドリューのそばに来て、一緒に走ろうと言ってくれました。最後まで一緒に走り、ゴール近くまで来たところで、知り合いの保護者の人がこう言いました。「私の娘は会ったこともない男の子と一緒に走っているのよ」と。アンドリューのことです。彼女の娘は自分の年代別グループで一位を取ろうと練習してきたけれど、アンドリューと走るべきだと思ったそうです。知りもしない相手のために、愛ある決断をしてくれたことに感動しました。自分が何かを失うに関わらず、人のために、という無私の行いです。

ヨハネの手紙二の宛先である女性とは、教会を意味するのだという人々もいます。私は、ある特定の、御心に適う子育てに忠実だった女性に向けたものだと思います。「あなたがたを真に愛しています」とあります。私たちの内に生きる真理が、お互いに愛するよう示すのです。愛と真理について書かれたこの書簡は実際に何を意味しているのでしょうか。皆さんも経験があるでしょうか。自分の直すべきところを指摘されても、相手との間に健全な関係性がなければ、ただあら捜しをされているように感じることを。指摘が愛のある助けになるかは、お互いの関係性によるところが大きいのです。自分を愛してくれていると知っていれば、指摘を受け入れやすくなります。信頼できる相手からであるならば、自分自身では見えていない部分への支援として指摘を受け入れられます。けれども愛のない、自分が正してやるというプライドによる指摘は、受け入れることが難しいです。愛と信頼がある相手からの言葉は、耳には痛くとも、関係性を更に築くために助けになるものです。そして信頼とは、まず神様との良い関係が築かれていることが土台となります。神様に対する信頼が増すほどに、神様の愛に対しても目が開かれてきます。私たちと神様の関係性が、私たちと周りの人たちとの関係性の鏡となることを神様は願っておられます。神様の愛と真理を中心にして人間関係を築くときに、すばらしい祝福が注がれます。

4 節に、子供たちが御父から受けた掟通りに、真理に歩んでいる、とあるとおりです。自分の人間関係を振り返り、神様の愛と真理が中心になっているか、考えてみてください。相手が自分に愛と真理を示しているか、ではありません。神様が私たちにしてくださることを自分たちも行う。その動機が大切な点です。神様が注がれる無条件の愛に私たちも倣うということです。そのような神様の真理と愛を人との関係の中で表しているか、自分自身を省みてみましょう。相手の反応がどうであれ、神様はあなたを通して健全な関係を築く機会を与えてくださいます。場所や相手にかかわらず、私たちが神様との関係性を周りに映し出せますように。きっと周りの人は神様が祝福される関係性のすばらしさ、その違いに気づくことでしょう。